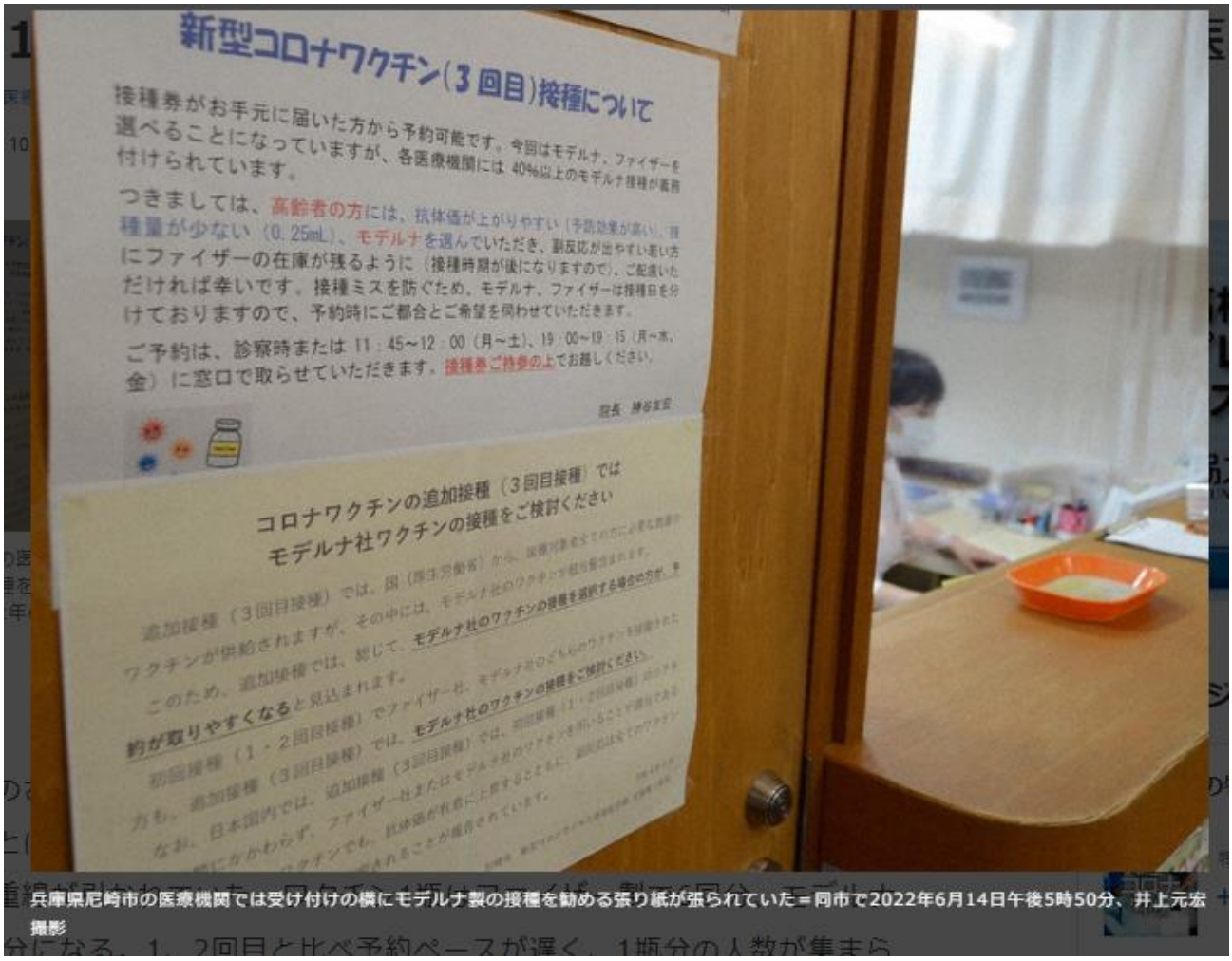
ワクチン 16 万回が廃棄の兵庫　「ほぼゼロ」の尼崎市、開業医が奮闘

2022/6/19 毎日新聞



兵庫県尼崎市の医療機関では受け付けの横にモデルナ製の接種を勧める張り紙が張られていた＝同市で2022年6月14日午後5時50分、井上元宏撮影

5 月末までに兵庫県内でモデルナ製の新型コロナウイルスワクチン約 16 万回分が使用期限切れで廃棄された。1、2 回目の供給は 9 割を占めたファイザー製が、3 回目の供給では多くがモデルナ製に切り替わったことが背景にある。そんな中、廃棄をほぼゼロに抑えた尼崎市では交差接種を促す開業医の独自の取り組みがあった。【井上元宏】

無駄なく日程調整

尼崎市のさくらいクリニック（桜井隆院長）。3、4 月のワクチン接種予定表は曜日ごとに赤字でモデルナ製、黒字でファイザー製の接種時刻が記入され、所々に二重線が引かれていた。ワクチン 1 瓶はファイザー製で 6 回分、モデルナ製で 15 回分になる。1、2 回目と比べ予約ペースが遅く、1 瓶分の人数が集まらなければ、残りは廃棄することになる。ワクチンを無駄なく使うため、予約した人にお願いして、接種日に多くの人数を集めるために日程を変更した。桜井院長は「1、2 回目にファイザー製の人にモデルナをお願いすることは大変」と話す。

県内のワクチンの供給は 1、2 回目はファイザー製が 9 割を占めたが、3 回目は 4 割がモデルナ製になった。尼崎市は医療機関での接種が 7 割を占めており、1 週間で 30 人以上に接種する医療機関に両社製のワクチンを割り当てた。神戸、姫路両市などの医療機関では原則ファイザーとしており、尼崎市独自の取り組みだった。

交差接種促し説明

さくらいクリニックではファイザー製の接種予約が先に埋まった。このため、カウンターで交差接種の有効性を説明する厚生労働省のホームページを印刷した紙を配り、桜井院長も患者に説明。それでもモデルナ製での接種を断った人がいた。誤接種を防ぐためファイザー製とモデルナ製での接種日を分け、使用期限が早いワクチンを先に使うため、小まめに調整した。

高齢者が中心の 4 月ごろまでは 1 週間で 100 人以上を接種したこともあり、ワクチンはほぼ使い切った。だが、5 月は 1 週間で 10 人程度に減り、接種日を集中させても、1 瓶を使い切れない日もあった。桜井院長は「もったいないし、打ちたいんだけど……」と声を落とした。県内で尼崎、明石の両市は 5 月までのワクチン廃棄をゼロとするが、このような廃棄はカウントされない。

ワクチン接種は予約に四苦八苦した 1、2 回目から一転し、5 月末までに期限切れで県内で約 16 万回分が廃棄された。尼崎市医師会新型コロナウイルス感染症等特別委員会の勝谷友宏委員長は、3 回目接種について「オミクロン株の重症化率が下がる一方で、熱やしんどさなどワクチンの副反応が報道で注目され、接種をためらった人がいたのではないか」と分析。そのうえで、「感染リスクを下げることなどメリットと比べて冷静に判断する考え方が広がってほしい」と話す。

県内の 3 回目接種回数は 5 月末までに 311 万回。使用期限切れで廃棄された 16 万回分は全体の 5%程度だ。姫路市では、2 回目が集団接種の 65 歳以上は接種券送付時にモデルナ製の集団接種会場に誘導し、9 割は会場で接種した。65 歳未満も別の方法で集団接種への誘導を図ったが、3 月末で 6 割にとどまり、2 万回分を廃棄した。廃棄が 5 万回分となった神戸市は、ワクチンが届いた時点で使用期限が 3 カ月後だったことなどを理由に挙げている。